

悪役令息に転生したら

僕を断罪するはずの推しに
寵愛されました2

アンナ

グレン家に長く仕える侍女で魔竜族。
ディルモアやアルヴィンが
幼い頃から知る存在。

ブラム・ヴァレカ

アルヴィンの甥で魔竜族。
無口だが気さくで、
同じ年のセオリスを気にかけてくれる。

アルヴィン・バーガンディ

魔竜族の侯爵令息で優秀な魔法医。
傲慢な性格だが、なぜかセオリスに
興味を持ち何かと世話を焼く。
ディルモアとは親友同士。

セオリス・ラーベル

BL小説の悪役に転生してしまった少年。
病弱で実父に疎まれて育った。
最推しのアルヴィンからの
断罪回避のために奔走中!

ディルモア・グレン

シェンの夫で魔竜族。
寡黙で一見すると無愛想だが
シェンのことを溺愛している。
侯爵家当主。

シェン・グレン

セオリスの兄。病弱なセオリスを
いつも心配している。
穏やかな性格だが芯は強く、
頑固な一面も。

目次

悪役令息に転生したら僕を断罪するはずの推しに
寵愛されました2

番外編 無自覚な二人

悪役令息に転生したら僕を断罪するはずの
推しに寵愛されました2

第一章 社交界デビュー

セオリス・ラーベルはまたこの夢かと考えた。
これは恐らく、前世の自分が読んでいた『鮮血侯爵の花嫁』というタイトルのボーイズラブ小説の一場面だ。

——森の中で、馬車は石を踏んで傾き、御者は賊に引きずり下ろされて地面に倒れている。
そこへジェット侯爵領の騎士団がやって来て賊を制圧し、御者は助けられた。

デイルモアが馬車の扉を開けると、シエンは弟であるセオリスを背に庇って剣を構え、今にも相手に切りかかろうとするとそこだった。

「待て、私だ。助けに来た。シエン、そんなににらまなくても、事情は把握している。社交界で私のことを好き勝手に吹聴する連中に、お前達の命が危ないとも言われたのだろう？」

「……その通りです」

「人族が魔竜族のことを深く知るよしもない。無知につけ込んだ連中はこちらで処分したから、安

心しろ。いったいどういう誤解をしたのかまでは分らないが、自分の番を殺す魔竜族などいるものか」

「あなたを信じていいと？」

「どうすれば信じてくれる？」

デイルモアと見つめあい、シエンは剣を鞘に納めた。状況がデイルモアがシロだと物語っている。デイルモアは右手を差し出した。

「城に帰ろう」

「……はい」

シエンはデイルモアの手を取り、傾いた馬車から外に出る。

「もう大丈夫だよ、セオ。馬車から出ておいで」

「はい、お兄様」

シエンが手伝う前に、デイルモアがセオリスをひよいと抱えて地面に下ろした。

（なんだこの男、弟にも親切にできるのではないか）

シエンの家族にそっけないから警戒していたが、そこまで悪い人ではないのかと、少しだけ気持ち的に譲歩する。誰が敵で味方なのか、今のシエンは霧の中にいるようでおぼつかない。

そこでシエンは、闇の中にたたずむ赤色の貴公子に気づいた。
デイルモアが言う。

「アルヴィンが、社交界の連中の動きが怪しいと教えてくれたのだ」

「どうしてまた、私達を助けてくれるんです？」

シエンはいぶかしんだ。アルヴィンがシエンに親切に振る舞いつつも、こちらが下手な動きをしないかと観察していることに気づいていたからだ。

「……別に。俺は嘘つきが嫌いなだけだ。それにお前に何かあつたら、デイルモアが悲しむだろう。」
大した友愛だなどシエンが思っていると、アルヴィンはくると背を向けた。

「用事も済んだし、俺は帰る。それじゃあな」

すうつと空気に溶けるようにして、アルヴィンの姿が消え失せた。転移魔法なんていう高度な魔法を息をするように使いこなすのだから、恐ろしい男だ。

「あまりアルヴィンばかり見るな。帰るぞ」

「へ？ ちょっとデイルモア？」

シエンがアルヴィンのいた場所を見ていると、デイルモアがシエンを腕に抱え上げて、馬上へ強制連行した。

ここで目が覚めたセオリスは、すっかりなじんだアンバー城の寝室でつぶやく。

「この夢、久しぶりに見たなあ。……コホン」

風邪のせいなのか、魔竜族では異能と呼ばれている天啓のせいなのかは分からないが、熱が出て

寝込んでいたのだ。前世の自分らしき人物が小説を読んでいる夢を見るのは、おおよそ二年ぶりだった。

「お兄様達つてば、小説と同じか、それ以上に甘いんだなあ」

セオリスがこの城に引越してきて以来、デイルモアが些細なことにやきもちを焼いて、嫉妬した対象からシエンを抱えて引き離そうとする場面は、すでに何回も目撃している。デイルモアは熊のような体格の使い道をよく分かっているのだ。

セオリスが小説の二巻で悪役になる人物に生まれたことに気づいたのは、五歳の時だった。

それから十歳になって、小説の通り、デイルモア・グレンの城に同居することになり、たまたまアルヴィン・バーガンディが主治医になってくれた。

使用人からのいじめや、機密盗難事件に巻き込まれた結果、セオリスは小説と違い、主人公カッブルとはとても親しくなり、さらにアルヴィンが後見人になってくれることになったのだった。

（そのせいか、あの小説の一巻で起こるはずだった事件もなくなったみたいなんだけど）

先ほど夢で見ていた内容は、本来なら一巻の後半に起きる事件だった。

（そういえば小説のアルヴィン様つて、嘘が大嫌いなキャラクターだったよな）

小説でアルヴィンがシエンを気に入る理由が、嘘をつかないからだだった。それを考えると、二年の付き合いでセオリスがアルヴィンに嫌われていないのは、恐らくセオリスも嘘をつかないからだ。（嘘ではないけど、本当でもないことなら言うけどね）

褒められないことを考えていると、侍女のアンナが控えめなノックとともに部屋に入ってきた。「失礼します。あら、セオリス様、お目覚めですか？　まだ熱があるようですからゆっくり休みましょうね」

「……うん」

アンナの優しい声に背中を押されるようにして、セオリスの意識は再びまどろむ。そのまま沼に沈むように、眠りに落ちていった。

数日が過ぎ、セオリスはようやく病床を抜け出した。

「うーん、いい天気」

窓辺でぐっと伸びをして、セオリスは窓の外の景色を眺める。

ジェット侯爵領の春の訪れは遅い。

高い山を背にして立つアンバー城や城下町には、山頂から冷たい空気が吹き下ろす。その風の勢いが緩やかになり、雪解けの水が川となって領内を満たした頃、ようやく草花が芽吹き始める。

一日ごとに庭が緑に染まっていくのを、セオリスは心穏やかな心地で見守ってきた。

（グレン家に来てから、もう二年か。この調子で、二十歳まではなんとか平穏に過ごせるといいんだけど）

セオリスは生まれつき病弱だ。さらには魔力漏出病まほうろうしつしやうびょうという病を抱えている。魔力が外に漏れ出

やすい体質で、魔力を消費しきると気絶して寝込むはめになる。

魔力漏出病で恐ろしいのは、病状が進行してゲート不全病ふぜんびょうになったら死ぬしかないということだ。この世界の生き物は大きな小なり魔力を持っている。

魔力は生命力とつながっており、魔力を消費しきると生命力を使うことになるのだが、それを防止するために魔力を出し入れする臓器にはゲートがついている。ゲートは通常ではそうそう閉じるものではないのだが、魔力漏出病の患者は、使用頻度が高すぎて、いずれ機能しなくなってしまうのだ。ゲートが閉じられなければ、生命力を消費するので、結果的に死にいたるというわけである。今のところ、この病気は不治の病なので、セオリスの寿命は二十歳という診断を受けている。

そんな状況なのにセオリスが心穏やかに過ごしているのは、理由がある。

（とりあえず、僕は『鮮血侯爵の花嫁』の二巻ではまだ生きていたし……、最低でも十八歳くらいまでは安全なんだよね）

セオリスは室内を振り返る。

緑とクリームイエローをベースにした壁紙やカーテンが使われており、落ち着いて過ごせる部屋だ。二年前に起きた事件に巻き込まれた際に、デイルモアがセオリスへの損害賠償にと、寝室と書斎を改装してくれた。

あれ以来、兄と義兄はセオリスを気遣ってくれており、セオリスは小説と違って、冷遇されていると感じたことがない。

（まあ、最初は使用人からのいじめが立て続けにあつて大変だったけどね）
そんなことを思い返していると、部屋の扉をノックする音が聞こえた。

「ど——」

どうぞ、と言い終える前に扉が開いた。

「よう、セオリス。来たぞ」

赤い髪と金色の目を持つ、鋭さを帯びた美しい男が、にやりと笑って右手を上げる。黒いマントとジャケットにトラウザーズ、^{えんじいろ}臘脂色のベスト、よく磨かれた黒い革靴。マント留めの赤い魔石はガーネットのように輝いており、炎をかたどった紋章も格好いい。小脇に抱えている青いミニ^{ばら}薔薇の花束でさえ様になっている。

この気安い態度の美青年の名は、アルヴィン・バーガンディという。魔竜族の赤竜の青年で、見た目は二十代くらいに見えるが、実年齢は二百二十二歳だ。ベリル侯爵家の長男で、有能な魔法使いであり、王侯貴族から引つ張りだこの魔法医でもある。

「アルヴィン坊ちゃま、もう少しお返事を待てないのですか。申し訳ございません、セオリス様。入室してよろしいでしょうか」

アルヴィンの後ろから、白髪交じりの黒髪をきちんと結い上げた老婦人が眉を吊り上げて叱りつける。灰色の生地にチェック柄がほどこされた侍女のためのお仕着せのワンピースが上品だ。

「こんにちは、アルヴィン様。アンナさんもうぞ」

セオリスは苦笑して、返事をする。

毎回注意しているのに、勝手に部屋に入ってくるというアルヴィンの無礼さは相変わらずだが、この二年でノックするところまでは成長してくれたから、セオリスとしては大した進歩だと思っている。

老婦人のほうは、セオリスの専属使用人であるアンナだ。元々はデイルモアの乳母で、デイルモアと赤子の頃からの幼なじみであるアルヴィンの世話もしていたため、アルヴィンに対してもまるで実の祖母のように接している。遠慮のないアルヴィンでも、アンナには弱い。

アルヴィンはセオリスの様子を見て、眉をひそめた。

「セオリス、どうしてそんな薄着で窓辺にいるんだ。やつと風邪が治ったのに」

アルヴィンはそう言うと、椅子の背に掛けられている灰色のカーディガンを手に取り、セオリスの肩に掛けた。

「大丈夫ですよ、アルヴィン様。暖炉に火を入れていますし、今日は暖かいので」

「駄目だ。ほら、こっちに来い」

「はい」

有無を言わさぬ口調で命令し、アルヴィンは暖炉に近い長椅子を示す。セオリスは素直に従い、長椅子に腰かけた。

「お二人とも、温かいお茶をどうぞ」

アンナは応接用のローテーブルに、お茶と丸い形のプレーンクッキーが載った皿を並べた。

「ありがとう、アンナさん」

「セオリスは相変わらずこのクッキーが好きみたいだな」

「このさくさくほろつとした感じが絶妙なんですよ」

アルヴィンの指摘に、セオリスは笑顔で答える。グレン家に来たばかりの頃に出されたクッキーだ。料理人に頼んでたくさん焼いてもらい、缶に入れて常備しているくらいお気に入りだ。

（本当なら、アルヴィン様はいずれ僕を殺す役どころなのに、すっかり過保護になったよなあ。安泰な未来のためにもアルヴィン様と仲良くしながら、いずれ自立して、侯爵家を出て行けるようがんばらないとね）

最初はつんつんしていたアルヴィンだが、親しくなっただけからは、世話焼きで面倒見の良い兄貴分へと変貌を遂げた。冷酷な面もあるけれど、医者なだけあって倫理観はしっかりしているし、根っこは優しい。そのギャップが好きで、前世では最推しのキャラクターだった。

「熱はないな、よし」

アルヴィンは隣に座ると、セオリスの額に手を当てて熱を測り、カルテに書き込む。セオリスの不治の病を診るために、アルヴィンは医者として週に三回ほど顔を出してくれる。

「心配してくれるのはありがたいですが、アルヴィン様。僕の体のことです。自分が一番よく分かっていますよ」

「そうだろうが、お前の大丈夫という言葉はあてにならない」

暗に過保護すぎないかと訴えたが、アルヴィンには取り下げられた。

セオリスは肩をすくめた。そもそも魔力漏出病がなくとも、セオリスの体は貧弱だ。季節の変わり目が来るたびに風邪を引いて寝込んでいる。この世界ではほぼ敵なしといえる魔竜族の貴公子から見れば、か弱く見えるのだろう。

これは聞き入れてくれそうにないと判断して、セオリスは話題を変える。

「アルヴィン様、この領地にもついに春がやって来ましたよ。この間まで地面は雪に覆われていたのに、今は草花が咲いています。もっと暖かくなったら、ピクニックに行きませんか」

「ピクニックもいいが、セオリス。この間、十二歳になっただろう。春の社交界デビューのほうが大事だ」

セオリスの誕生日は、二の月の頭にある。グレン家の人やアルヴィンから、ささやかにお祝いしてもらったのを思い出した。実家にいた頃、病弱なセオリスを疎ん^{うと}でいた父は、誕生日パーティーを開いてくれたことがなかった。さすがに生まれた時はお披露目^{ひらめ}パーティーを開いたそうだが、当然セオリスの記憶にはない。

だから、グレン家で温かく祝福されたことは、セオリスの胸を優しく温めてくれた。

「社交界デビューですか？」

思いもよらぬ単語だ。セオリスはきょとんと瞬^{まばた}きをする。

「なんで驚くんだ？ 人族でも、貴族家に生まれれば誰でも社交界デビューをするはずだが。そうだな、アンナ」

アルヴィンは傍に控えているアンナに問う。アンナは頷いた。

「ええ。確か、デビュータレントというものがあると聞き及んでおりますが……」

「デビュータレントは、未婚の女性だけです。白いドレスがドレスコードで、陛下にごあいさつして、その後は舞踏会で踊るんです。確か参加できるのは十六歳からで、ダンスをきちんと踊れるのが条件だったはずですよ」

華やかなデビュータレントは絵本に描かれていることが多いので、女性向けの行事でもセオリスも知っている。

アルヴィンが問う。

「人族の男はどうするんだ？」

「跡継ぎでしたら父親や親族の年配者に同行して、他の貴族に紹介されたりしながら仕事を覚えていくんです。早ければ十二歳くらいからでしょうか……。シエンお兄様は、十四歳くらいには社交に行っていましたよ」

後継者教育がしっかりしている貴族家では、そうやって領主の仕事を子どもに少しずつ教えていくものだ。貴族は家と家のつながりを把握していないといけないので、幼い頃から人間関係を覚えさせるのである。

「ああでも、領主が子どもの誕生日パーティーを開くところもありますよ。シエンお兄様は後継ぎでしたから、お父様が毎年誕生日パーティーを開いていました」

セオリスも体調が良ければ、会場に行つて、客へのあいさつに顔を出したものだ。

アルヴィンは眉をひそめる。

「セオリス、お前はさつきからシエンと名指ししているが、どういうことだ。その言い草だと、お前の誕生日パーティーは開いてなかったみたいじゃないか」

「そうですよ」

セオリスはこくりと頷いた。

「お父様は病弱な僕を、『長男のスペアにもならない』と嫌つておいででしたから。生まれた時のお披露目以外では、パーティーを開いてもらつたことはありませんね」

アルヴィンとアンナがしかめ面で黙り込んだのに気づいて、セオリスは慌てて付け足す。

「そんな顔をしないでください。僕は全く気にしてませんよ！僕は真冬生まれですから、自分の誕生日も寝込んでいることが多かったです……。それに、お母様やお兄様はお祝いしてくれませんでしたから」

セオリスとしても、知らない人達に祝われて気疲れするより、母と兄にお祝いしてもらうほうが気楽で良かったのだ。

「それに、グレン家でお世話になってからは、すでに二回もお誕生日をお祝いしていただきました

から、とても嬉しかったです。アルヴィン様やアンナさんも、誕生日プレゼントをくださったじゃありませんか」

今年の誕生日には、アルヴィンからは緻密な刺繍が施された布製の寝セットを、アンナからはラベンダークッキーをもらった。

（ディルモアお義兄様は銀狐の毛皮を使った毛布をくださったって、シエンお兄様はガラスペンとインクセットだったな）

富豪のディルモアは気軽に貴金属を与えようとするので、こんな高価なものをもらっても管理できないと必死に断ったのを思い出す。子どもにはいいいと貴重な物を与えないでほしい。毎月もっている予算ですら使いきれず、出入りの商人を呼ばれて、なんでもいいから買ってみると放り出されたのは記憶に新しい。

（あの時は確か、高い本を買って誤魔化したんだよね）

買い物をして冷や汗をかくなんて、そうそうできない体験だった。

（グレン家では大事にされすぎてちよつと困るなんて……贅沢な悩みだよなあ）

セオリスはため息をついた。

ディルモアがセオリスに親切にするのは、妻であるシエンが弟を溺愛しているからだ。

それに加えて、この二年のうちに、セオリスが魔法陣学の発展に貢献したという実績もある。そちらで商品化したものが利益を出していると聞いていた。

ディルモアからすれば、セオリスに優しくすればシエンが喜ぶし、セオリス発案の商品で領地も潤っているのだから嬉しいはずだ。

セオリスが感慨に浸っていると、アルヴィンは勝手に決意をしていた。

「こうなったら、社交界デビューのお祝いは盛大にしないといけないな。心配するな、セオリス。ディルモアとシエンに言っておけば、喜んでパーティーを開催するだろう」

「ええっ、どうして居候の僕のパーティーをグレン家で開くんですか？ やめてくださいよ、侯爵夫人の弟だからって、図々しい顔をして威張っているみたいじゃないですか」

泡をくって止めようとすると、アルヴィンには本気で訳が分からないという顔をされた。

「はあ？ お前こそ、何を言ってるんだ。ジェット侯爵であるディルモアと、バーガンデイ家の俺が後見しているんだから、パーティーを開く名分はあるだろう。社交界デビューは、貴族ではそれほど大きな意味があるんだ」

続けて、「そもそも」とアルヴィンは語気を強める。

「お前の実家の領地だって、今はドラゴネア王国に併合されてるんだから、王宮で開かれる春の祭典での社交界デビューには、必ず参加しないといけない」

アルヴィンに説かれて、セオリスは頷いた。

「ドラゴネア王国には、そんな決まりがあるのですね、分かりました。僕、がんばります！」
王宮での社交界デビューと聞いて、セオリスは表情を強張らせて、ぶるぶると震えている。

「おいおい、今からそんなに緊張してどうするんだ？」

セオリスの肩を叩いて、アルヴィンが笑い飛ばす。

「そんなに心配しなくても、礼法くらい、きちんと学べばすぐに習得するだろう。お前は基礎ができてるからな」

「そうでしょうか」

セオリスはグレン家に来てからは、家庭教師を呼んで週に二回、二時間程度の勉強を続けている。座学は合格点をもらっているが、礼法は自信がない。他人と交流せず、ほぼ部屋で生活しているせいだ。

「実際に上手くできるかどうかは分かりませんよ」

「セオリスの場合、マナーよりもダンスのほうが気になるな」

「ドラゴネアでも、国王陛下にごあいさつした後、舞踏会になるんですか？」

セオリスはそう聞きながら、ドラゴネア王国で人気の小説を思い出した。確かに小説にも、主人公が春の祭典でのダンスに憧れる様子が描かれていたではないか。

「そうだ。それから、ドラゴネアだと、女パートと男パート、どちらも踊れないといけないからな」

「へ!? どうしてですか」

「魔竜族は人族と違って、婚姻に性別は関係ないって知ってるだろう？ そりゃあ、デイルモアとシエンは仲が良いわりに、まだ子どもができていないから実感がないかもしれないが……。そもそ

も魔竜族同士でも子どもはできにくいからしかたがない。時間が解決するだろう」

セオリスは目を白黒させる。

（確か、魔竜族は卵で生まれるんだっけ。僕には詳しくは分からないけど、彼らの生殖活動には、性別も種族も関係ないみたいなんだよね）

魔竜族は繁殖力は低いが、相手がどんな種族だろうと、変身して番にすることができる。例えばアルヴィンの祖母はカナリアという鳥で、祖父は鳥に変身して求婚したと聞いている。人族のセオリスからすれば、魔竜族は奇想天外な種族なのだ。

セオリスが本に書かれていた魔竜族の生態を思い出していると、アンナがそつと口を挟んだ。

「アルヴィン坊ちゃま、セオリス様がお育ちになったザ男爵領では……というより、元々所属していた人族の国は、基本的に人族の男女で婚姻するのですよ。人族は女性しか子どもを産めませんから。セオリス様が戸惑われるのも当然です」

「ああ、俺ら魔竜族からすると、性別にこだわるのは不便に思えるがな」

魔竜族には不便という一言で片付くことらしい。セオリスは種族の違いを突きつけられて、ぽかんとした。

「えっと、それでどうしてどちらのパートも踊らないといけないんです？」

「魔竜族は、踊りたいパートのほうを踊るからな」

「では、アルヴィン様もどちらも踊れるんですか？」

「そうだ、貴族の必須教養だからな。とはいえ、俺は男パートしか踊らないことにしているが」
「え？」

それはどういうことだと、セオリスは混乱した。

「魔竜族では、将来的に夫になりたいのか、妻になりたいのかの自認があれば、そちらを選ぶんだ。俺は夫側になりたい。だから、女パートは踊らない」

「ええーと、それだと、皆が夫側になりたがったら、ダンスのお相手がいなくなっちゃうんじゃないですか？」

セオリスが素朴な疑問を口にする、アルヴィンは笑った。

「はは、もつともな質問だ。答えは簡単だ。そういう時は、身分が上の者の希望が優先されるから、ダンス相手があぶれることはない」

「同じ階位だったら？」

「こちらの希望が通らないなら、ダンスの相手を断るだけだ」

「なるほど」

アルヴィンは侯爵家の子息だ。侯爵より爵位が上なのは、王家と公爵家だけである。その二つ以外の相手には、強く出られるというわけだ。

セオリスは権力差を考えて納得した。

「そうか、僕は男爵家の次男だから、階位的には他の方に合わせる形になるんですね。それでどち

らも踊れないといけないのか」

男爵は貴族階級では下位にあたる。さらに下には、一代のみに与えられる準男爵や、名誉職の騎士爵もあるが、そちらは除外して、自分が一番下にいると思っていたほうが変に油断せずに済む。

「そういうことだが、どうしても踊るのが嫌だったら断ってもいい。俺が間に入ってやるよ」

アルヴィンは過保護なことを言った。

セオリスは混乱し始めた。セオリスは階位的に下のほうだから、なおさら男女両方のパートを踊れるようになるべきだというのに、嫌なら断ってもいいとはなぜなのだ。

「それは、どういう理屈で許されるんですか」

「どの社交界だろうと、後見人……つまり保護者の意見が優先されるのは当然だろう」

「えっ、それってつまり、アルヴィン様は僕の付添人をしてくださるんですか？」

セオリスは男だから、貴族令嬢のような付添人は本来不要だが、初の社交界で保護者が傍にいてくれるのは心強い。

「そのつもりだ。いつもと違う場所に行くんだから、主治医は傍にいたほうがいいだろう。なんだよ、俺が付き添いだと嫌なのか？」

「まさか！ 嬉しいです。僕、がんばってダンスも練習しますね！」

正直なところ、セオリスはアンバー城に来たばかりの頃の事件のせいで、魔竜族が多い社交界に顔を出すのは気が引けている。しかし、貴族に生まれた以上、社交界デビューに出席するのは義務

だ。どうせ避けられないなら、気心の知れたアルヴィンにサポートしてもらおう方がいい。

「そういえばアルヴィン様、社交界デビューをしたら、僕も王都の学園に通えるんじゃないか」

「学園？ あんなどころにわざわざ通わなくても、家庭教師で十分だろ」

アルヴィンはげんそうに眉をひそめた。

意地悪で言っているわけではないと、セオリスは分かっている。

ドラゴネア王国には貴族の子息子女が通う学園がある。だが、アルヴィンのような高位貴族なら、学園よりもハイレベルな教師をそろえることができるので、わざわざ通学なんてしない。だからアルヴィンも、教養を学ぶのはそちらで足りるだろうと言っているのだ。

「でも、ドラゴネア王国の中位や下位の貴族は学園に通って、規律を学ぶものなんでしょう？」

というのは建前で、セオリスはできれば家を出たいと考えていた。

『鮮血侯爵の花嫁』の二巻では、セオリスが悪役になる流れがある。これはグレン家にいることで巻き込まれるので、いつそ主人公カップルのシエンとデイルモアから離れば、その流れも断てるかもしれないと期待しているのだ。

（今のところ、皆とは関係性は良好だけど……何があってそうなるか分からないからなあ。まあ、気づいたら一巻のトラブルは全部解決していたけど！）

一巻は主人公のシエンの父が亡くなり、借金が判明して、デイルモアに会いに行くところから始まる。そしてシエンに一目惚れしたデイルモアから、シエンは借金返済と引き換えに婚姻を迫られ

る。シエンは弟の保護を条件にあげて結婚し、ザザ男爵領の借金を全て清算するのだ。

だが嫁いだはいいものの、デイルモアが治める侯爵領に暮らす黒竜の多くは人族を嫌っており、シエンはまずは使用人とバトルするはめになる。

（その辺は、僕がアンバー城に来るまでに解決していたみたいなんだけど……それでも差別は根強くて、僕は使用人にいじめられたんだよね。隣国とのいさかいに巻き込まれたのも原因みたいだったけど）

デイルモアはタイトルの通り、小説では鮮血侯爵と呼ばれていて、黒竜と赤竜以外には怖がられている。王都での社交界で、デイルモアに懸想^{けさう}している他家の魔竜族の女性が、その悪名を出しにして、シエンも弟ともどもいずれ殺されるぞと脅すのだ。

そんな折、たまたまデイルモアが城に入り込んだ賊を始末したせいで、返り血を浴びているのを見て、シエンは驚愕^{きょうがく}する。アンバー城にいる反シエン派にそのかされ、弟を連れて逃げようとして、逆に罠にはめられてしまう。あわや殺されるといところで、デイルモアが助けに来て、誤解が解けるという流れだった。

（あの小説のシエンお兄様視点は、周りが信用できない人ばかりで、全部怪しく見えて不安になるっていう心理描写が巧みだったよな。この世界でも、社交界でトラブルはあったようだけど、僕を連れて逃げるようなことはなかったから、解決したみたいなんだよね）

恐らく、小説のような事件が起きなかったのは、セオリスが巻き込まれた機密盗難事件のせいで

はないかと推測している。あの時、アンバー城内の不穏分子が一掃されたので、反シエン派も排除されたのではないだろうか。

つまり、これから気を付けるべきなのは、小説の二巻のストーリー展開なのだ。

セオリスが考えにふけっていると、ふいにアルヴィンの声が低くなった。

「……セオリス」

「は……い？」

セオリスはビクツと肩を揺らした。アルヴィンが据^すわった目をして、右の拳^{こぶし}に炎の魔法をま^まとわ^わせていたのだ。少し考え事をしていた間に何が起こったのだろうかと驚く。

「お前にそんな不安そうな顔をさせるなんて、いったいどのどいつが何を吹き込んだんだ？ 言え」

「おかしいですね。セオリス様には怪しい連中など近づけてもいないのに」

アンナも首を傾^かげて不思議そうにつぶやくが、セオリスをじつと見つめる真剣さからは、正直に話せという圧力を感じる。セオリスは大急ぎで手を振って否定した。そうしなければ、罪のない使用人に咎^{とが}がいきそうだ。

「ちち違います！ 誰も何も言ってません！ ただ、できるだけ自立したいなと思ひまして……」
「また家出をしたくなったのか？」

アルヴィンが重ねて問う。セオリスは首を横に振る。

「そうではありませんけど、僕はいずれ独立するんですから、社会勉強は必要ですよ」

「ドクターストップだ。学園は寮生活が原則だ。お前みたいに体が弱い者は通えない。そんなに入学したいなら、一週間体調を崩さなかったら考えてやる」

「な、なんでアルヴィン様の許可がいるんです？」

「ほう。セオリス、お前は俺が後見人だってことを忘れたようだな？」

「怒らないでくださいよ、ちゃんと分かっていますから！」

アルヴィンは炎を消したが、不愉快そうなまま腕を組んでいる。

「そもそもお前、魔竜族が苦手だろうに。学園なんて行ったら逃げ場もなくて最悪だぞ？」

「怖いですけど、嫌なことから逃げてばかりではいられませんし……。小説にも、大人になったら嫌なことも我慢して乗り越えろって書いてありましたよ」

セオリスの主張を聞いて、アルヴィンは今度は頭痛を覚えた様子だった。指先でこめかみを揉んでいる。

「それはそうだが、無理することはないだろう。それ以上、よく分からない理屈をこねるのはやめろ。俺の言うことが不服なら、保護者のデイルモアやシエンにも言ってみろ。絶対に反対されると思っぞ」

「……では、言ってみます」

セオリスはおずおずと頷いた。

「シエンお兄様、デイルモアお義兄様、僕、社交界デビューをしたら学園に通ってみたいです」

折よく晩餐の席が一緒になったので、セオリスは思い切ってシエンとデイルモアに希望を伝えた。しかし、二人の返事は明快だった。

「却下」

「シエンに同じく、許可できない」

「シエンお兄様、本当に駄目ですか……？」

セオリスがじつと見つめると、シエンは分かりやすくてじろいだ。

シエンは金髪碧眼の美青年で、セオリスより十歳年上の二十二歳だ。元々美しい人だったのだが、デイルモアに愛されているせいか、美に磨きがかかっている。家族での晩餐だから、シャツに薄青のベストとトラウザーズだけというラフな装いなのに、きらきらと輝かしい。

「そ、そんなふうに懇願しても、駄目なものは駄目！ この間も風邪を引いていたでしょう？ 寮に入ってから病気になるたらどうするの」

シエンは心配そうに言った。そんなシエンの隣席にいるデイルモアもまた、うんうんと頷いた。

「セオリス、学園は魔竜族の子息子女だらけだぞ。君は魔竜族が苦手だろうに、わざわざ苦労しに行くことはない」

話し方はぶっきらぼうだが、セオリスへの気遣いが感じられた。

デイルモアは背が高く体格も良い。短い黒髪を丁寧に撫でつけ、冷徹な灰色の目をしている。無表情なこともあって堅物そうだが、意外と優しい黒竜の男だ。今日も黒と灰色をバランスよくそろえた服を着ていた。

（相変わらず、お二人は仲がいいな）

デイルモアはジェット侯爵で、グレン家の長だ。晩餐のテーブルでは、上座……いわゆるお誕生日席に座るべきなのだが、あえてシエンと並んで座っている。

そんなデイルモアの真向かいでは、アルヴィンが上品な仕草でステーキを切り分けている。アルヴィンは右隣にいるセオリスに、ちらっと勝ち誇った視線を向けた。

「だから言っただろう。絶対に反対するって」

アルヴィンはデイルモアとは赤ん坊の頃からの幼なじみで、互いの家を勝手に出入りできる兄弟同然の親しさだ。今夜の晩餐も、診察ついにと気まぐれに加わったが、慣れている使用人は平然と対応していた。

「でも、アルヴィン様。僕が一週間体調を崩さなかったら考えるっておっしゃいましたよね？」

セオリスが必死に言い募ると、アルヴィンはやれやれと首を横に振る。

「なんであんなところに通いたいんだ？ 俺には全く理解できないな。言っておくが、魔法の理論だけなら、お前はとつくに学園を卒業しているレベルだぞ？」

「ええつ、そんなまさか！」

「こっちこそ、まさか自分の実力も知らないのかって言いてえよ。この二年であれだけ魔法陣学の本を読んでいたくせに、何を言ってるんだ、お前は」

アルヴィンは呆れ返っている。

内容だけを聞けばすごいと褒められているはずなのに、声音では馬鹿にされている。

「セオリスは持病のせいで魔法を使えないから、実技はとれない。運動関係も無理をすべきじゃない。他の座学なら、家庭教師で事足りる。ほら、なんのメリットもないだろ」

アルヴィンの説明を聞いていると、確かにセオリスが学園に通う必要はなさそうだ。

「でもっ」

ここまで否定されると、なんだか悲しくなってきた。

少しばかりむきになっている自覚はある。これでは駄々をこねている子どもみたいだ。

言い負かされたセオリスが薄っすら涙ぐんだのを見て、アルヴィンは降参した。

「はあ、しかたがない奴だな。分かった分かった。お前がわがままを言うなんて珍しいから、一週間だけ待ってやる。約束だからな」

「はい……！」

やったー、がんばるぞ！ と意気込んだセオリスだったが、結局、一週間もたずにまた風邪を引いた。

「セオットら、そんなに落ち込むなんて、そこまで学園に通ってみたかったの？」

セオリスのベッドの傍に腰かけたシエンは、不思議でしかたがないと言いたげだ。

風呂の後にうつかり湯冷めしてしまっただけで風邪を引き、熱を出したセオリスは、ふてくされて布団の中で丸まっている。そんなセオリスに、シエンは問いかける。

「貴族が学園に通わずに家庭教師から教育を受けるなんて、珍しくもないのに……。いったいどうしてそんなに学園に行きたいの？」

「……だって、学園ならお友達ができるかもって思ったんです」

自立するための練習がしたいのだからって言ったら、シエンが「そんなに家出したいの？」と悲しみそうなので、セオリスは違う理由を引っ張り出した。

「ああ、友達かあ……」

ようやくシエンは納得したようで、うーんとうなる。

「確かに、セオには一人も友人がいらないもんね。あんまり良くないかも……」

シエンはしばらく黙り込んだ。

「そうだね、学園は許可できないけど、社交界デビューをした後に、お茶会を開くのはどうかな？」

「お茶会ですか……？」

セオリスは布団の中で丸くなるのをやめて、外に顔を出した。

「そうだよ。同年齢の子を招待するよ。一人くらいは気の合う子が見つかるんじゃない？」

セオリスはばあつと明るい表情になった。

（原作の展開を避けるなら、小説の二巻の時期が過ぎるまでグレン家を離れるのが最善だろうけど、友人作りも自立の一步じゃないかな？ 友達の家に遊びに行くといういで、外出もできるし！）セオリスの記憶では、小説のセオリスには友人がいなかったはずだ。友人を作るだけでも、悪いルートから外れるのではないだろうか。

「ありがとうございます、お兄様！」

「ふふっ、まったくもう、かわいいんだから」

シエンはセオリスの頭をくしゃくしゃに撫で回す。

「せっかくだから、一緒にお茶会の準備をしてみようか？　もしかしたら将来、セオがお茶会を開く側になるかもしれないし……」

「学ぶのは構いませんが、ザザ男爵領では、お茶会は女主人の領分では？」

人族が多いザザ男爵領は、男女で明確に役割が分けられている。だからセオリスがザザ男爵領を継いでからお茶会を開くにしても、主催になるとは限らない。素朴な疑問を口にする、シエンはセオリスに言い聞かせた。

「セオ、人生は何が起きるか分からないよ。私をごらん。ザザ男爵として領地にいるはずだったのに、ここでジェット侯爵夫人をしているでしょう？」

「確かに……」

「学べる機会があるうちに、学んでおけばいいよ。こういう知識は役に立つことはあっても、無駄にはならないからね」

「そうですね。では、よろしくお願いします、お兄様！」

セオリスはにこっと笑った。お茶会を開くことで友達作りができそうなのも嬉しいが、多忙な兄から直接指導を受けられるのも楽しみだ。

「えへへ、お兄様と勉強。嬉しい」

「ちょ、ちよつとセオ、熱が上がってるよ！　顔が真っ赤だ。誰か、解熱剤を持ってきてください！」興奮して熱が上がったようで、セオリスの様子に慌てたシエンは呼び鈴を激しく鳴らした。



魔竜族が治めるドラゴネア王国の王都ニヴィアスは、この国の古い言葉で「雪のような」と名付けられている通り、いたるところに白い石が使われている。そんな建物が日に照らされると、輝かばかりに美しい。王都のすぐ南にあるセレスト湖が明るい青色をしているので、遠方から見るととても絵になる光景だ。

馬車の窓に張りついていたセオリスは、目を輝かせてディルモアを振り返る。

「ディルモアお義兄様、王都があるところは、大昔、落ちてきた星が山をえぐってできたというの

は、本当なんですか？」

魔竜族が書いた小説で、王都が舞台となっているものには必ず書かれているくらい有名な話だ。その記述を思い返してみると、クレーターの中に都があるようにも見える。

魔竜族は人族に比べると、険しい土地に住んでいる。王都も同じで、ドラゴネア王国中央部に位置する大きな山の上にあった。

「確かにそう言われているが、本当かどうかは知らないな。ドラゴネア王国には五千年の歴史があるが、建国した頃にはすでにこういう地形だったそうだ」

「へえ、すごいなあ」

窓の外ばかり熱心に見ているセオリスに、隣の席のアルヴィンは呆れている。

「こら、セオリス。そんなに興奮していると、また熱を出すぞ」

「そこまでやわじゃありませんよ」

「そろそろ浮遊区間が終わる。危ないからちゃんと席に座れ」

「はい」

セオリスは素直に返事をして、ふかふかの椅子に腰かけた。

こんな山の上に王都があるため、馬車で来るのも一苦労だ。そこで、山のふもとから王都の入り口までは、専属の魔法使いが馬車に浮遊の魔法をかけて、上まで運んでくれることになっている。運賃を払わなければならないが、快適で速く到着できるので、ほとんどの人が魔法使いの世話にな

るらしい。

アルヴィンの言う通り、馬車はすぐに王都の入り口に到着し、石畳の路面へと着地した。そこから馬での移動に変わるため、馬車がガタガタと揺れ始める。

「あの、素朴な疑問なんですけど……。魔竜族の人達は、竜の姿で空を飛ばないんですか？ 馬車で移動って面倒くさくないのかな」

「ふふ、セオも気になるよね。私も不思議に思ってた聞いたことがあるよ」

セオリスの質問を聞いて、シエンが微笑ましそうに頬を緩める。

「魔竜族は縄張り意識が強いから、竜体だと喧嘩^{けんか}になりやすいんだって。それに、この辺りは白竜の領土だから、他の竜は失礼にならないようにと遠慮するそうだよ」

シエンの説明に、デイルモアが補足をする。

「もちろん、緊急事態では竜体に変身することもあるが……。最近は平和だから、基本的に竜体での飛行は禁止されている」

竜の姿になることもあるのかと、セオリスは興味を抱いてシエンに問う。

「シエンお兄様は、デイルモアお義兄様の竜体を見たことがあるんですか？」

「一度だけ。結婚した後、番契約をした時にね」

「へえ。黒竜というのですから、黒い鱗^{うろこ}をした竜なんですか？」

「そうだよ。侯爵領の名前にもなっている宝石のジェットみたいで綺麗だったな」

シエンが思い出す仕草をして褒めると、デイルモアはごほん^{せきぼん}と咳払いをする。照れているのか、目尻と耳が赤く染まっていた。

「シエン、称賛をありがとう。しかし、我々は普段は竜体を見せないようにしているから、恥ずかしいのでやめてくれ」

「えっ、デイルモア、魔竜族にとって竜体を見せるのは恥ずかしいことなのですか？」

シエンも知らなかったようで驚いている。

「竜体でいるのは、魔力が不安定な幼体の時くらいだ。それ以外で私達が竜体になるとしたら、危機的狀況だけだよ。全力で魔法を使わないといけないような……そういう時だ」

セオリスとシエンが首を傾げているのを見て、アルヴィンが口を挟む。

「つまり、所構わず竜体になるような奴は、いい大人なのに魔力コントロールが下手だっけ教えているのと同じってことだ」

シエンがほうと息をつく。

「ああ、そういう理由なんですね」

「だから先ほど危機的狀況って、デイルモアお義兄様はおっしゃってたんですか」

「そうだ、セオリス」

デイルモアが肯定したことで、彼が気まずそうにしていた理由に納得がいった。

だが、すぐにセオリスは二年前の事件を思い出して首を傾げる。セオリスの専属使用人だった

マイルズが実は隣国アクエラのスパイで、ジェット侯爵領の機密文書を盗み出そうとしていたのだ。その際、セオリスは人質にとられた。

「ええと、でも、それだと、前にマイルズが逃げようとした時、馬を寄越せって言ってたのはどうしてですか？ あの時、マイルズは竜体になって逃げれば良かったんじゃないですか？」

「ああ、あれか。黒竜は潜伏に長けているからな。人の姿で群衆に紛れ込んだほうが逃げやすいんだ。空に竜が一体飛んでいるほうが目立つだろう？ それに、同じ竜体ならば、私の騎士団のほうが速く飛べるからすぐに捕まえる」

「それじゃあ、戦う仕事をしていない魔竜族の場合、地面よりも空のほうが逃げ場がなくて不利なことですか？」

「そうだ。よく理解している」

デイルモアは向かいの席から手を伸ばし、セオリスの頭を優しく撫でた。シエンはそのやりとりを嬉しそうに眺めている。

「そういうことから、セオリス。社交界で竜体の話を出すのはやめておけよ」

アルヴィンがセオリスに注意するので、セオリスは思わず言い返す。

「そういうタブーは早めに教えてくださいよ、アルヴィン様ってば」

「俺らには当たり前のことすぎて思いつかなかったんだ。いいだろう、今、知ったんだから」

このやりとりに、シエンが胸に手を当てて息をつく。

「はあ、社交界で口に出さなくて良かった」

「お兄様は、王都には何回か来ているんでしたっけ？」

「まあね。ジェット侯爵夫人として、陛下にごあいさつしないといけない。それにパーティーに招待されて、デイルモアと参加したこともあるよ。そうそう、すっかり忘れていたんだけど教えておくれ。デイルモアは黒竜と赤竜以外には評判が悪いから、会場では驚かないように気を付けてね」
「そういえばそんな設定があったなと、『鮮血侯爵の花嫁』という小説のタイトルをセオリスは思い出した。」

「デイルモアお義兄様の評判が悪いのですか？ どうして？ お義兄様は真面目で優しい方じゃないですか」

「ありがとう、セオリス」

デイルモアは目尻を下げて礼を言う。

「私は前回のアクエラとの戦争に参加したのだが、その時に怪我人の救護をして回っていて、血まみれになってひどい有様だったんだ。それを見た者が、敵を殺戮したと勘違いしたのだよ」

「それで、こいつはかわいそうにも、鮮血侯爵って陰で呼ばれているんだよな。俺が働いてた救護所まで、患者を運んでいただけなのに」

「他人事だと思って」

けらけらと笑うアルヴィンを、デイルモアはじろりとにらむ。セオリスはアルヴィンに問う。

「アルヴィン様も戦争に参加したのですか？」

「ああ、軍医としてな。魔竜族同士の戦は、ほとんど魔法合戦だからひどい有様なんだ。一方で、魔竜族は頑丈だから、魔法医が治療すれば回復しやすいって利点もあるけどな」

「腕の良い魔法医は前線まで出ないことがほとんどだから、アルヴィンにはずいぶんと助けられた。この男が傲慢に振る舞っていても尊敬されているのはそのせいだ」

セオリスは素直に心からの称賛を抱いた。

「わあ、格好いいです、アルヴィン様」

「そうだろう？ もっと褒めていいぞ」

アルヴィンは遠慮なく賛辞を受け取ったが、少しすると耳を赤くして、ふいと窓の外を見た。
(褒められるのが大好きなわりに、すぐに照れるのも相変わらずだなあ)

そんなアルヴィンの様子が、セオリスには微笑ましかった。

「セオ、グレン家の町屋敷に着いたよ。アンバー城とはずいぶん趣が違うでしょう？」

シエンがにこにこ、窓の外を示す。いったん馬車が止まり、門が開くと通り抜ける。

広々とした前庭の奥に、白い壁と青い屋根を持つ瀟洒な館が建っている。洗練された雰囲気があるおしゃれな建物だ。

「この辺は白い石しか採れないから、我が家も王都の建物に合わせてあるんだ」

デイルモアがそう話すうちに、馬車は館の玄関ポーチに止まった。館の使用人がずらりと並んで出迎えてくれている。

御者が外から扉を開けると、デイルモアが真つ先に降りて、シエンに手を差し伸べる。シエンはデイルモアのエスコートを受けて、軽やかに馬車から降りた。

「はあ、まったく、相変わらず王都は明るすぎて嫌になる」

デイルモアは目を細めて、悪態をついた。

「まあ確かに、陰気臭い黒竜には、白竜もこの領土も陽気すぎてまぶしいよな」

アルヴィンが馬車から降りて、デイルモアを茶化す。デイルモアはすかさず言い返す。

「はん。騒がしい赤竜ならば、あの方々ともさぞ親しくできるのでは？」

「騒がしいってなんだ。お前らが無口なだけだろ！」

アルヴィンが応酬して、デイルモアとにらみあいになる。二人は人族では二十代前半くらいなのに、たまに子どもの喧嘩のようなことをし始める。

「喧嘩はやめてくださいよ。わっ」

セオリスが恐る恐る馬車の踏み台に足を下ろそうとしていると、アルヴィンがパチンと指を鳴らした。急に体が宙に浮き、ゆつくりと地面に下ろされる。

アルヴィンが浮遊の魔法を使ってくれたようだ。

「ありがとうございます、アルヴィン様」

「おう。グレン家の馬車は大きいから、子どもには降りにくいよな」

「ゆつくり降りれば大丈夫ですよ」

セオリス達が乗っていた馬車の後ろに、荷物を載せた馬車が到着する。中から侍女のアンナが降りてきた。

「王都は久しぶりですね。ああ、開放的すぎて落ち着きません！」

デイルモアと同じようにアンナも不愉快そうだ。

アンナが文句を言うのは珍しい。デイルモアやアルヴィンが怒らせさえしなければ、基本的には穏やかで優しい人だ。

グレン家の町屋敷にも使用人はいるので、本来ならそちらに世話を頼むべきだ。だが、二年前の事件のせいで、魔竜族を苦手としているセオリスのために、アンナはこの旅にもついてきてくれたのだ。

「僕にはちょっと寒いけど、体は楽だよ」

「この気温でも人族には寒いんですね。王都は山の上にあるせいで、夏でも涼しいのはいいのですが……。魔素が濃いので、セオリス様のご持病にはよろしいのでしょうかね」

アンナはすぐに馬車に戻って荷物から外套を取り出し、セオリスに羽織らせた。

「念のために冬用コートを持ってきて正解でしたわ」

「ありがとう、アンナさん。アンナさんは寒くないの？ 女性の方は、体を冷やすのは良くないん

でしょう？」

セオリスが薄手の外套を着ているアンナを心配するので、アンナは微笑んだ。

「お優しいこと！ ご心配いただくのは嬉しいのですが、わたくしも魔竜族ですから、鱗のおかげで寒くありませんの」

アンナはデイルモアとアルヴィンのほうを残念そうに見る。

「まったく！ お二方に足りないのは、こういう気遣いです。アルヴィン坊ちゃまはともかく、デイルモア坊ちゃまは奥様に寒くないかの一言も聞けないのですか？」

「アンナ、皆の前で坊ちゃまなんて呼ばないでくれ」

デイルモアは苦情を言ったが、アンナににらまされると、目を逸_そらした。アルヴィン同様、デイルモアはアンナには頭が上がらないのだ。

それでいてアンナの言葉で気になったのか、デイルモアはシエンに問う。

「アンナの言う通りだ。シエンは寒くないか」

「ふふ。私は厚着をしているので大丈夫ですよ」

シエンは我慢できずに笑いをこぼす。

（ちよつと強引な気もするけど、シエンお兄様が幸せそうなので、僕も嬉しい）

セオリスがにこにこ眺めていると、様子を見ていた執事らしき青年が驚いたように言った。

「母上、本当に人族の子どもをかわいがっているのですね……！」

黒い髪に灰色の目、中肉中背で地味な雰囲気の男だ。

「フィル、勤務中ですよ」

「失礼いたしました！」

アンナに注意され、フィルと呼ばれた男はすかさず謝った。

「母上つてことは……、アンナさんの息子さん？」

セオリスはアンナに問う。

彼女とはこの二年の間に親しくなったので、一人息子がいるということは聞いている。

（確か、卵を抱えている時に旦那さんが不慮の事故で亡くなって、今後の生活をどうしようかと困っていたら、遠縁でもある先代の侯爵から、デイルモアお義兄様の乳母にならないかと声をかけられたんだっけ？）

アンナは魔法使いとしても優秀で、その辺の暗殺者よりよほど強いそうだ。

それでも育児をしながら危険な仕事をするわけにはいかないという理由で、侯爵家に仕えることにしたという話だった。

「失礼いたしました。セオリス・ラーベル様でいらつしやいますね。母であるアンナより話を伺っておりました。私はアンナの息子で、フィル・カーライルと申します。ご滞在中にお困り事がありましたら、いつでもお申しつけください」

フィルはにこやかにあいさつすると、改めて一行に向き直ってお辞儀をする。

「改めまして。侯爵ご夫妻、お帰りなさいませ。アルヴィン様、セオリス様、ようこそいらつしやいました。お部屋のご用意はできておりますので、ごゆっくりお過ごしください」

フィルに合わせて、居合わせた使用人達もいっせいにお辞儀をした。どうやら町屋敷にいるのは黒竜だけではないようだ。赤や緑の髪を持つ使用人もいて、アンバー城よりカラフルに見えた。

「ああ、シエンとセオリスに不自由をさせないよう、くれぐれも頼むぞ」

ディルモアは念押ししてから、アルヴィンを振り返る。

「そういえば、アルヴィンはうちに宿泊でいいのか？ お前もたまには、自分の家の町屋敷に顔を出してはどうだ」

「医者の仕事で王都に来る時に泊まっているから、それで十分だろ」

「しかし、今回はお前の甥も社交界デビューするのだろうか？ こちらにいいのか？ 姉君が怒っても知らんぞ」

「甥には家でお祝いを言つたし、すでにプレゼントも贈った。あとは会場で言えいいだろ」

「まったく……姉君から文句を言われる私の身にもなってくれ」

ディルモアの苦情を、アルヴィンは聞き流している。

（そういえば、アルヴィン様って次期侯爵のはずなのに、あまり家の仕事に関わってない感じだな？）

セオリスはふと不思議に思った。

これまではアルヴィンは名医として有名だから、そちらで忙しいのだろうと思っていたが、ディルモアの様子を見ると違うような気がしてきた。

（小説にその辺の事情は書いてあったっけ？ 小説でのアルヴィン様は、主人公カップルを助けるサブキャラだったから、あまり詳しく書いてなかったと思うんだよねあ）

セオリスが覚えているのは、前世の自分らしき人物が病死するところまでだ。彼は三巻が出るのを待ちわびていたので、もしサブキャラについて掘り下げられるにしても、三巻以降だったのではないだろうか。

「姉さんは放っておいていい。それよりディルモア、グレン家の問題のほうに面倒だろう。またお前の親戚が茶々を入れてくるんじゃないかねえか？ あのクソジジイをセオリスに近づけさせるなよ」

「ああ、パーティー会場で会うかもしれないのは面倒だ。アルヴィン、あの男に不快な真似をされたら燃やしていいぞ」

「言われるまでもない」

ディルモアとアルヴィンは物騒なことを言い合っている。

（クソジジイ？ 燃やす？ なんの話か分からないけど、怖い……）

セオリスはすすつとシエンの後ろに隠れた。

それを見たシエンは眉を吊り上げる。

「お二人とも、子どもの前で怖い会話をしないでください！ 私もあなたの叔父は苦手ですが、パ

ティー会場でトラブルを起こされては迷惑です」

「くしゅん」

もつと話を聞いてみたかったが、セオリスは鼻がむずつとするのを我慢できず、くしゃみをしてしまった。

シエンが途端に心配して、会話を切り上げる。

「おっと、いけない。中に入ろうか、セオ。温かいお茶を飲もう」

「私も一息つきたいから、同席しよう」

シエンやデイルモアに促され、セオリスはグレン家の町屋敷に足を踏み入れる。

大理石が美しい玄関ホールを歩きながら、セオリスはシエンの言葉をヒントに考え込んだ。

（叔父っていうと、父親か母親の弟ってことだね。そういえばデイルモアお義兄様は若くして侯爵を継いだから、親戚ともめたんだっけ？）

グレン家で二年も過ごしているのに、セオリスはデイルモアの叔父とは面識がない。それどころか、セオリスの耳にその名すら入ることもなかった。

どうしてだったかと考えていると、ふと白昼夢のように、前世で読んでいた小説の内容が頭の中に浮かび上がった。

「……マガフ家のダレル？」

セオリスはぼつりとつぶやいた。

グレン家は小国並みの財産を持つ富豪だ。親戚が財産を狙って当主の座を欲しがっており、不服として王家に訴えたのだ。

当主としては無能だと指摘されたデイルモアは怒り、王家から当主の座にふさわしいというお墨付きをもらうなり、その親戚をアンバー城に出禁とした。デイルモアにとって因縁のある相手なのだ。

デイルモアが足を止め、眉をひそめて問う。

「セオリス、なぜその名前を知っているのだ。まさかシエンが教えたのか？」

「いいえ！ あのような俗物、セオに近づけさせたくもないのに」

シエンは珍しく、吐き捨てるように言った。

「セオリス、では誰から聞いたのだ？」

デイルモアが重ねて質問するが、セオリスはそれどころではない。

「ええと……急にその単語が頭に浮かんできて……なんだかふらふらします」

気分が悪くなってきたので、セオリスは額に手を当てる。ここだけ急に空気が薄くなったような錯覚を覚えた。ふらつと前のめりに倒れるセオリスを、すぐ傍にいたアルヴィンがとっさに抱き留める。

「うおっ、危ねえな」

アルヴィンは玄関ホールの床にセオリスを寝かせると、右手首に触れて、体の状態を見た。

「すごい勢いで魔力が減っていく。魔力漏出病の発作だな。ひとまず応急処置を……」

アルヴィンが何か言っているのを聞きながら、セオリスはさらに詳しいことを思い出した。
(ああ、そうだ。あの小説の二巻でセオリス・ラーベルが悪役になるんだけど、彼はそれを焚き付けた黒幕だよ！)

小説でセオリスがアルヴィンに殺されるシーンが強烈すぎて、黒幕がいたことまでは思い出せていなかったようだ。

よくよく考えてみると、使用人にいじめられて兄を恨んでいたくらい実権を持たない少年が、侯爵夫人である兄の盟石^{めいせき}を盗んで逃げるなんて思い切ったことを思いつくだろうか。

それに、小説でもセオリスは病弱で、外出なんてほとんどしたことがない世間知らずだ。数日とはいえディルモアの追跡をかわして、町に潜伏なんてできるわけがない。手引きした者がいたのだ。

「うーん……最悪……」

セオリスは悪態をついたところで、魔力が急激に底をついた反動で気絶した。

「セオ、しっかりして！」

シエンの悲鳴じみた声が遠くで聞こえた。

セオリスが目を覚ますと、見慣れない天井があった。

白い石造りの部屋は、カーテンやラグ、長椅子の布まで青で統一されている。

「起きたか」

アルヴィンがひょいと視界に割り込んだ。セオリスは焦って尋ねる。

「も、もしかして春の祭典は終わっちゃいました？」

「半日しか経っていないから問題ない。こういうことを見越して早めに来たから、療養する時間もある。心配するな」

「到着早々、すみません……。あれ？」

水でも飲むかと思ったのに、体が重くてすぐには起き上がれない。

困惑するセオリスの額に、アルヴィンは氷嚢^{ひようぶ}を載せた。冷たさが心地良くて、セオリスは目を細める。

「応急処置をしようとしたが、お前の魔力消耗が速すぎて、俺の魔力譲渡が追いつかなくてな。結局、魔力切れで気絶したんだ。熱も出ているから、大人しく寝ておけ」

「はい……」

熱が出ていると分かった途端、頭ががんと痛みだし、体のだるさも感じてうんざりした。

「吐きそうだったら言えよ。洗面器を用意している」

「吐き気はありませんけど、世界が回っています。それに、頭が痛いです」

アルヴィンはカルテに症状を書きつける。

「ふむ。それは熱のせいだ。解熱鎮痛剤を飲んだほうがいいな。胃薬も出そう。食欲はあるか？」

「ありません」